

心きたる

31
No.

2010 謹賀
新年



開山上人と共に 歴史を拓いた生涯



お寺のおばあさんが亡くなった。

平成二十一年十月十三日

蓮香院妙唱日栄大姉

俗名 清水栄子 享年八十五

おばあさんが亡くなった。たいへん綺麗な顔してた。

「最近、古い奥さんの顔見ないけど、どない？元氣ではんの？」

昔からの古い檀家さんは、お寺の行事に参詣した折に、よく声をかけて戴いていた。

若い（自称）方の奥さんは、庫裡と本堂の間をバタバタ走りながら、

「あ、落合さん、ありがとう。お母さん、奥で寝てるから声かけて上げて、反応ないけど」

阪神大震災が転機になったようだ。

一年三ヶ月の間避難生活していた「キャンプ・ガレッジ」では、塩ビ波板一枚の天井からぶら下がった裸電球。その下で家族が輪になって食事するような、さながら昭和三十年代にタイムスリップの風景。生活環境が激変したことが大きな要因になったのだろう。

「おばあちゃん、また同じこと言うてんでえ」

「そやねん、ちよっと最近おかしいわあ」

老化にしてはチト早すぎるが、現実是否めない。

自分の母親が痴呆症と宣告され、現在の医療では治療法が無く、進行を抑えることしかない事に、「あんなにしつかり者だった母が、なんで？……」と妻は涙したものだ。認めたくない悲しく悔しいことではあるが、これからは現実と正面から向き合うことしかないと思ったのが、長い介護の始まりであった。

負けん気の強かった母が、いつもニコニコしたかわいなおばあちゃんに変貌し、第一步の「モノ忘れ」。「どこいった、どこいった、ちゅわ（言）んならん」と言いながらバッグの中かき回す事の繰り返し。また、おもしろい伝説もいっぱい残してくれた。

私が二階の事務室で執務をしていると、階下の玄関でなにやら話し声が聞こえてくる。耳を凝らすとばあちゃんの声だが、来客の様

2月
14日

副住職

清水孝彦上人

大荒行成満帰山式



入行前日、妻子としばしの別れを惜しんで、記念撮影。

旧臘十一月より日蓮宗大荒行に入行しています。

今回は三年ぶりの二回目、第再行としての入行です。

払暁三時から始まる水行は一日七回。

その間は尊神堂の荒筵に座し只管読経三昧。

何よりも今回は、震災復興行守寺本堂再建円成を特別に祈念しての入行。

また檀信徒の皆様が安寧であり、

そして皆様の家が益々繁栄しますように祈念しての入行であります。

来る二月十日には成満出行の運びとなります。

二月十四日の行守寺に於いて帰山式を執り行います。

是非ともご家族お揃いでご参詣下さり、

百日修行の功德をお受け下さいますよう、

今からご予定に入れて下さいますようお願いいたします。



子もない。「ん？」座を立てて廊下に出て階下を見下ろしてみると、珍妙な光景が展開されている。ばあちゃんは玄関の壁に取付けてある大きな姿見の前に立って、鏡の向こうに広がる所に行こうとしている。しかし、鏡の正面間近に立っているもんだから、すぐ目の前には人間が立ちほだかつて行く手を拒んでいる。その人はどうも意地悪な性格のようで、ばあちゃんが右に避けようと動くと、その人も同じように動いて正面に立ちほだかる。左に動いても全く同じような意地悪。何度も右や左に動いてその人を避けようとするが、その人はまるで鏡に映ったような動きをして、通うせんぼしている。

ついに、その人に抗議を始めた。

「あんたはん、わたし向こうに行きたいのになんで邪魔しはんの？」

「……」

「あらこの人、何にも言いあらへんが。ねえ、何とか言うてえな」

「わたし、あんたはんは何か気に入らんことした？あつたら言うて」

「……」

「アラだんまりこくってはる。どうしたらいいんやろ？向こうに行きたいのに」

白髪を手ぐしで掻き上げながら、困惑している。鏡の向こうに立ちはだかる人に懇願もしてみるのが、全くラチ明かない。

鏡の前で懸命に一人芝居している様子を、グリーンとズームアウトして眺めてみると、実におもしろい。

声をひそめて「オーイ、教子、章子。ちよつと来てみ、おもしろいモン見れるでえ」

四つん這いになった三人が階段の上から雁首だけ出して、笑い転げていると、ちよつと妻が玄関を開けて帰ってきた。病状の進行に伴い、「おかしい行動」が多く目立つようになっていく。別段の驚いた様子もなく、むしろ病状の進捗に複雑な心境なのかもしれない。

「お母さん、もう向こうに行く用事済んだから、行かなくていいのよ。一緒に帰ろ、ね」

「あ、そう」と、何事もなかったように素直に、妻と一緒に自室に帰った。

お寺のすぐ側に鳥原貯水池がある。市当局は震災後、この貯水池の周辺整備に力を入れて、周遊歩道、公衆トイレ、休憩所等環境が大変よくなった。そのせいで、四季を通して未明から、健康ウォーキング愛好者が押し寄せるようになっていた。



寒い時期だったと思う。ある日、未だ明けやらぬ頃、玄関の戸をドンドンとたたきまく叩く音に目が覚め、恐る恐る開けてみた。

全く見知らぬおばさんが、「この山のずっと下の道におばさんが倒れているけど、おたくのおばあさんじゃないですか？」

なんだいきなり？藪から棒に。そんなことあるはずもなく、ぐつぐつと部屋で寝てる……、ハズ。

「え？……。うちのばあちゃんは部屋で寝てますよ」

そうですかと、その人が帰ったあと、念のためとばあちゃんの部屋に行ってみると……居ない。トイレ……居ない。まさかと、すぐ一枚羽織り外に出た。まだ真つ暗。懐中電灯を手に、真つ暗な山道を駆け下りてみると、通りがかりの人達が救急車を呼んで、すでに病院に向かったと言う。結果、ちよつとしたカスリ傷程度だった。この事件が極めて不思議である。

ばあちゃんが倒れていた現場まで行くには、鬱蒼とした山の急斜面を下りて行かなければならない。しかも、一人歩けるだけの山道がつつら折りになっていて、懐中電灯がなければ漆黒の闇で道と敷の区別がつかない。元気な者でも通らないのに、ヨタヨタの老人がどうやって現場までたどり着いたのか、家族の語り種となっている。

「ほんま、どう考えても不思議や。万が一、転げ落ちながらとしても絶対木に引っ掛かって止まってしまうしなあ」

完全に「迷宮入り」してしまった。

やがて、不可解な行動が多くなり、笑ってばかりいらなくなってきた。真夜中、「草木も眠る」ころ二階の部屋で熟睡していると、枕元にかすかな気配が、暗い中背筋が凍る思いで目を凝らすと、すぐ枕元にばあちゃんが立っている。妻はびっくりして跳び起き、「おかあさん、なんなの？びっくりするやないの」と言うが、ばあちゃんはただ笑ったまま立っているだけ。肝を凍らすとはこのことだろう。まだ、ちゃんと足もあつたから、まだイイ。タマは足裏の肉球で音もなく歩くが、ばあちゃんは肉球もないのに音も無く瞬間移動。今となっては我が家の語り種となって、



娘二人「おばあちゃんな、びっくりすんで。ふと気が付いたら、そこに立ってんねん」と声をそろえて大笑い。

びっくりするだけでは済まないのが「介護」。いちばん危険な階段をばあちゃん一人降ろす訳にはいかない。凍てつく真冬の真夜中、床を出て、ばあちゃんを自室まで連れて行かなければならない。おまけに、パジャマ一枚のばあちゃんが風邪引かないように世話もしなければならぬ。これが一晚のうちに何回も繰り返されることもある。また、「シモの世話」にはなしを移せば、新しいトイレがばあちゃん専用になり、やがてそこは筆舌に表すことも憚られる状況になって、今現在も開かずの扉で封印したまま。お陰で以来私は長年に亘り、もよおした時には本堂の簡易便所に出張している。

事例を挙げれば枚挙に暇が無いが、だんだん枯れるようにベッドでの時間が長くなり、寝たきりになって久しい。「寝たきりは寝たきりで大変な部分はあるけど、相手に振り回されることなく自分のペースで面倒見れるから」と、妻は穏やかな心で介護に専念できるようになった。

やや距離を置いた位置から客観的に見られる立場の私は、妻の頭の血管がいつ切れるか、いつ介護で倒れるか常に心配であった。妻にとっては血を分けた母でありながら、心身ともに忍耐の限界を超えた時の「惨劇」は常に隣り合わせであった。ばあちゃんの介護について夫婦で語り合うとき常に、自分の母だから他人に委ねるようなことはしたくないので、「最後まで自分の手で面倒みたい」という姿勢であっただけに、妻はつい「頑張って」しまう。頑張った妻が「介護はほんとにきつい事では済まへんことが、よう解った」と言えるようになったのは、もう「寝たきり」になってある意味、少し楽になってからのことであった。



世間では、「喪中につき……」と言う、いわゆる喪中ハガキ出すのが一般的のようだが、八十五歳までの天寿を全うしたことだし、娘二人は思い残すことなく介護看病に手を尽くした。それでもなお、新年慶賀など謹めと望むだろうか。やはり、正月は正月として寿ぐことの方が、おばあちゃんは喜んでくれるはず。正月は、新年を迎えたことを慶び、その年が多幸で、家族が健康であることを祈る大事な瞬間です。喪中ハガキは出さなかった。

とやうな北の電車とバスの旅

池友会
宮沢賢治の菩提寺「身照寺」参拝

小山先輩、たいへんお世話になりました。

青森大会、大鰐町の妙徳寺集合との案内。いくら飛行機嫌いの私でも、青森まで新幹線の乗り継ぎはチトしんどい。航空券は少しでも早い方が安いの、取り敢えず予約しておいて、と。「なんか他にないのか」。時刻表で調べると、「あつたー、寝台特急・日本海」こりゃあ、いい。いわゆる「鉄っちゃん」ではないが、横になりさえすればどこまでも行ける。時間はかかっても、手に汗にぎり決死の覚悟で乗るヒコキより、よっぽどいい。夕刻、大阪駅を「出発進行ーッ」。ホームをゆっくり離れた「日本海」は、一路青森へと動き出した。ハコには片手の指で足りる乗客。なんの気兼ねも無く、ワンカップの一人宴会。ZZZZZZ……。

翌朝目が覚めると車窓の光景も日本海の海岸線から内陸部と一変していた。テレビ番組「世界の車窓から」は、わずか五分ほどかな？ 大好きでよく観る。「日本海」は特段風光明媚な沿線走る訳ではないが、洗面所で顔を洗った後寝間着のまま、なんの変哲もない車窓の風景をただボーッと見ているのも、私にとっては一興。加えて、母親には内緒だが、こう言う場面には絶対タバコは欠

おもしろ 秋田美人考



「秋田のおなご 何して綺麗（きれい）だと 聞いただけ野暮（やば）だんす 小野小町の生まれ在所 お前はん知らねのげー」と秋田音頭にまで歌われる。

秋田美人の謎

気候環境説：冬場の降雪により日照時間が少ないために紫外線による肌への影響も減り、また湿気が高いことは肌の艶やかさにとって非常に良いと言う。

ロシア人説：秋田には色白の肌をしている女性が多いとされます。その中で秋田県人のDNAとロシアや欧州でのDNAタイプが似ているので、その昔ロシア人やヨーロッパから渡ってきた人が秋田に住み着いたという説があります。



俗説：その昔、関ヶ原の戦いで西軍に肩入れしたとして秋田に転封された水戸の佐竹氏が、領内の美人をすべて引き連れた上、秋田の美しくない女性を水戸に送りつけた。だから今茨城にはブシカ居ない、秋田美人は茨城美人のことだ、と茨城男子は思っている。



見渡すと「大鰐温泉駅」で下車したのは二、三人のようだ。改札に向かうと駅員が誰もいない。キップを持ったまま改札を出たが、なにか不正行為をしているようで不必要にオドオドしてしまった小市民。「あ先輩もご一緒でしたか」。深夜、「金沢駅」から乗ったと言う牧先輩と一緒にになった。

工業地帯、重要港湾、政治的中枢部、軍事施設などは解像度の高い鮮明な画像で、何も無い山間部や田舎などはごく低い解像度で非常に粗い画像しかない。とは言え、軍事上や政治上の重要施設などは民間人が見れる訳ないのである。

閑話休題。インターネット環境にある読者の皆さん。「Google Earth」知ってますか？部屋に居ながらにして世界一周ができます。私の家なんか干して布団まで見えるし、太陽光発電のパネルの数まで判ります。地球上であれば、とは言え、全てが詳細に映し出される訳ではない。要するに、情報として価値の高い対象、すなわち都市部、



オレの酒、呑めねえのかよ

「池友会」解散の後、二日置いて東京での会議の予定があった。東北から新幹線で一気に東京に行くと、二日間も時間をつぶさなければならぬ。私にとっては地獄だ。そうだ、長距離バスを乗り継いで行こう！旅費の節約にもなるし。

内容については触れないが、青森の若いお上人が「小山所長さんの奥さんがいちばんきれいです」と言っていたように「きれいな奥さんだなあ」と思っていたところ、「秋田出身なんだよ」と先輩。どうりでと納得。その「道理」を検証してみたくなった。



オレの酒、呑めねえのかよ



日蓮宗兵庫東部宗務所長に就任してから三期目の半ば、十一年を迎える。毎年、年度始めの四月、全国七四管区の宗務所長が東京の日蓮宗宗務院に招集され、「全国宗務所長会議」が開催される。二泊三日の間、宿舍の品川パシフィックホテルと宗務院の間を、朝夕貸切バスで往復する様子は、「護送」そのもの。

今年は、会議の議長に選出された。全国の都道府県にある七四の管区は更に、「九州教区」や「近畿教区」や「関東教区」などと地方別に括られ、十一の教区にまとめられる。毎年この十一人の「教区長」の中から議長が選出されることになっている。

指名を受け、会議が始まるまでのわずかな間少し緊張したものの、議長席に座った瞬間快感に変わった。広い会議場の中心に設えられた議長席はいちばん高い位置になっており、百八十度いちばん奥の席まで見渡せる最高のロケーション。



平成21年度全国宗務所長会議

南串中学校 同窓会の案内なんだけど

頭髪の色と量で辿る
キョーシンの今昔



中学生のころ、中庭で父と。

中でも、兄弟みたいに育ってきた竹馬の友、ジョーイッチャン。
幼年期は私の実家である本堂前の境内でよく遊んだ。ソフトボールもやっていたが、成長と伴にさすがに境内では狭くなって、稲の切り株が残ったままの田んぼでやつたりもしていた。薄暮の「ごはんヨーッ！」で、後ろ髪を引か

「キョーシンクン、いま来年の還暦同窓会ば企画しよるけん、楽しみにしとって」と、故郷長崎のジョーイッチャンが電話をくれた。彼とは、小中高と一緒だったので、「高校？中学？」と訊いたら、中学だと言う。「オリヤ、早生まれやけん、まだ五十九ばい」と、ジョーイッチャンにもその折一応申告しておいたが、細かい事はさて置き、問答無用で約還暦を迎えることになった。

改めて宣告されると、「エーッ、還暦？...ジジイじゃん」と、子供の頃の風景がセピア色で瞬時に脳裡を巡った。

最小単位の集落「赤山」には民家が七軒あるが、ここに五人の同級生がいた。ものすごい人口密度だ。生まれた時から中学卒業まで、学校に行くのも、遊ぶのもずっと一緒だったトシロー、エツロー、ユキオ、

れながら踵を返す。
実りの秋と言えば、「シイちぎり行こい」と、よく山に行ったものだが、あのシイの実の味がいまだに忘れられない。採ったシイの実はボケツトにはとても入りきれないので、シャツの中に入れて、弾けんばかりに腹を膨らませて帰ったものだ。あのシイの木が家



18 歳、池上本門寺で修行時代。



23 か 24 歳ころ、編集者時代。

調べてみたら、学名を「スダジイ」と言うことが判った。これで満足のいく検索結果が得られるようになった。あとは、枝振りのいい植木を選択するだけである。

話が逸れたが、「還暦同窓会」。今まで、時々同窓会の案内をもらいながら、遠方に住んでいるせいで、全て欠席を余儀なくされていた。それだけに、今回は絶対出席するぞと、心に堅く決めていた。案内状が届いた。一日千秋の想いで待っていただけに、開封にワクワク。

ガーンッ！と来て、.....ヘナヘナヘナとなった。

立場上、二月十一日以降一週間ほど公務が続き、どうしても空けられない。私が楽しみにしていたのを尻目に、涼しい顔で「あら、残念ね」と、妻。



現在、孫の姿に相好を崩す

もう、諦めがついた。

次の機会は、「喜寿同窓会」？.....。どうも同窓会には縁がなさそうだから、その次は「米寿同窓会」？開催は介護施設で医者と坊さんを待機させて？それなら葬儀会館のホールを借りてやった方が早い。やつとオレの出番か。もう卒寿でも白寿でもなんでもいい、



十一月、長崎日誠寺落慶法要で同級生と。
左・ジョーイッチャン
中・センジ

顔面蒼白 茫然自失

顔面蒼白、茫然自失の瞬間など、生涯にそんなにあるものではない。

もう四年ほど前になるか、八月十三日と言えばお盆のお経廻り「棚経」のピークである。夏真っ盛り、その日は概ね三十軒ほどの檀家さんにお参りする中、半数以上のお家で冷たいお茶を戴くだろうか。量にして、かなりの分量になると思うが、すべて汗となって体外に放出され、尿意をもよおさない。その日の予定をすべて終え、帰宅。汗まみれの法衣を脱ぎ、やっとトイレに。勤めを終えた開放感にゆったりした気持ちで小便器の前に立って用を足しながらふと下を見た瞬間「ガーンッ！」と極度の衝撃を受けた。そこには放出されている真っ赤な尿によって、便器全体が見える見るうちに真っ赤に染まっていくではないか。便器に溜まっている透明の水が、手前の方からだんだん赤く染まって行く様は、自分の肉体がガラガラと壊れて行くように映り、比例して血の気が引いていった。便器の前で、呆然と立ちすくんでいた事は忘れもしない。怖くて妻にもなかなか言い出せなかった。自分に「しっかりせえ」と言い聞かせて、やっと気を取り戻した。すぐにでも検査に行きたいが、お盆真っ最中で、スケジュールびつしり。何日かして、病院に行ったと思う。結果、尿管結石だったことで、今こうして原稿を書いている。

それからちょうど一年後も血尿が出たが、原因が判っていたので何の心配もなかった。

そして、今年の夏のことである。今何時だろうと灯りを点けてみたのが、深夜二時過ぎだった。まだこんな時間か。初めは少し腰の痛みを感じ、目が覚めたのであった。最近ストレッチしていないからだろうと、床の上で体を左右にひねったりして様子をみたが、腰の痛みが軽くなる風はない。そのまま続けてみたが、だんだん痛みが増しているような気がする。こりや、腰じゃないな。真夜中に、うずくまったり、立ってみたり、体操してみたり、布団の上であらゆる体勢を取ってみるが、体の奥の痛みは増すばかり。もう、動かないではいられなくなった。長い時間経ったようだとき計を見ると、まだ十分しか経っていない。朝まで耐えられるかな？時を刻む秒針の動きを恨めしくじっと凝視してみても、どこふく風とばかりに同じリズムで耳に響く。病院の診療開始時間まで七転八倒して耐えるか、救急車を呼ぶか脳裡で葛藤が始まった。ついに、弱い方のきょうしんが勝利を収めた。

ここ数年妻は階下で、介護のためにばあちゃんの横で寝ている。腕力はしっかり保たれているので転げ落ちたりする心配はないが、歩くのもやつとの状態では、階段を降りるのも一苦勞。夜中に寝ている妻の許に、そーッと這い這い。何年ぶりかの「夜這い」。やっと妻の枕元にたどり着いた。痛み of せいとは言葉体を曲げ、寝ている妻の枕元で、両手を付き額を伏せた体勢で訴えかけようとする、「お代官様、お願ひえがござえますだ」と、口をついて出てしまいそうになって、自分でもおかしかった。

痛みは激しいものの、「真夜中にサイレン鳴らして来られたらえらいこっちゃ」と、救急車をあきらめてタクシーにした。神戸市立中央市民病院の救急診療で、とりあえず座薬を服用。

まだこんな時間かと、時計ばかり見ているうちに少し痛みが緩和してきたような気がする。気のせいだろうか。「先生、少し痛みが和らいだような気がしますけど……」

余韻が消えない
珠玉の響き

『日本人の忘れもの』

(著 中西 進)

内容を全部紹介したいが、そうはいかない。

序にかえた「日本文化の力」の中で、「尊敬する力」について著している。

日本語には尊敬の表現が多い。外国人泣かせだという話をよく聞く。もちろん外国語にも尊敬の気持ちを出す表現はある。しかしそれは、むしろ丁寧な表現という方がふさわしい。

じつはこのことは、とても大事だと思う。丁寧というのは対人関係で人を傷つけない気配りであろう。ところが尊敬というのは、つねに相手を上位におく態度である。対等の関係の中にはたらく思いやりと、上下関係を前提とした尊敬とは、まったく異質だろう。

いや、それでこそ、尊敬はとかく評判が悪い。階級制度があるから民主的でないとか、女性のことばにとかく尊敬が多いから性差別だとか。

しかし、人間関係を上下におくのを、私は美德だと思う。なぜなら人間、つねに自分が劣っていると考えてこそ、他人から教えられ、他人のいいところを学び、自分を補っていつて成長することができるからだ。

反対に自分が誰よりも優れていると思っていいたら、成長はない。



「そうですね、そろそろ薬が効いてくる頃でしょう」

検査の結果、結石が動いたことによる激痛であった。

「石が下りてくるのを、ただ待つしかありません。水分をじょうじょう摂ってください」

その後はひと月に一度くらいの間隔で「石」がどの位置にあるか、検査に行くという状況であった。十月の下旬だったろうか、朝小便器の前に立って用をたしていると、ほんの一瞬尿管が塞がれ、そのあとすぐ堰を切ったような勢いで尿と同時に、黒い米粒大の物質が放出され、「カチーンッ！」ともの凄いい音がした。「結石」が出て、便器にぶち当たったのである。その瞬間、固形物が尿管を通過する感触がはつきりあった。あの金属音にも近い音質からして、ダイヤモンドかチタンか、かなり硬いものだろう。

便器にまだ残っている。記念に残しておこう。

串山会系 赤山組姐御

世代交代の兆し。跡目相続争いに決着か
背景には現姐御会長、痴呆夫介護のため？

赤山
新聞

長年、赤山組の姐御会に君臨してきたNみ江の姐御会々長引退が濃厚になってきた。

赤山組に詳しい消息筋の情報によると、米国オバマ大統領に縁の深い雲仙市小浜温泉で姐御会懇親会が盛大に開催された。それぞれの夫は懇親会への同伴を無理やり強要され、「拒否」の選択など許されるべくもなく面従腹背した。

二次会では夫たちが下僕と仕え賑やかに運ぶ中、部屋のどこかで誰かの携帯電話が鳴りだした。みんな一斉に自分の携帯を探しにかかる。床の間に置いているのもあり、テーブルの隅に置いているのもあり、バッグの中をかき回す人もある。Nみ江会長の夫・T徳は、テーブルに無造作に置いてあったテレビのリモコンをやおら手にして「もしもし」とやった。「ん？……」一瞬、皆その奇妙な光景に凍り付いたが、見てはいけなモノを見てしまったと、見て見ない振りを装うのに懸命だった。この一件が引き金になったと言う。



さらに件の消息筋は、憶測ですがと付け加えながらこう続けた。「会長のNみ江は、近年自分の老化を身体の時折に感じながら、いずれは近いうちに今の地位を誰かに明け渡す日が来ると思っていた中で、気になる存在がJん子だったんです。彼女は、若いのに度胸が据わって、会長の前でも臆することがない。アルコールが入ると、会長ですらタジタジとなる場面も過去にはあったようです。今までの言動で夫の痴呆を少し疑っていたんですが、今回の件でいよいよ本物となって、背中をポンと押されたかっこうになった。おそらくJん子が最有力でしょうね」

ウラを取るべく、関係者に取材してみた。なかなか応じてくれなかったが、匿名とモザイクを条件に重い口を開いてくれた。

なぜかフラダンスが好きな長老格のHさ子は、「いいんじゃない？よきに計らえ」と悠然としたものの、「ま、事前にお伺いはあるでしょうから……、ホッホッホ」と、きっちりと押さえている。

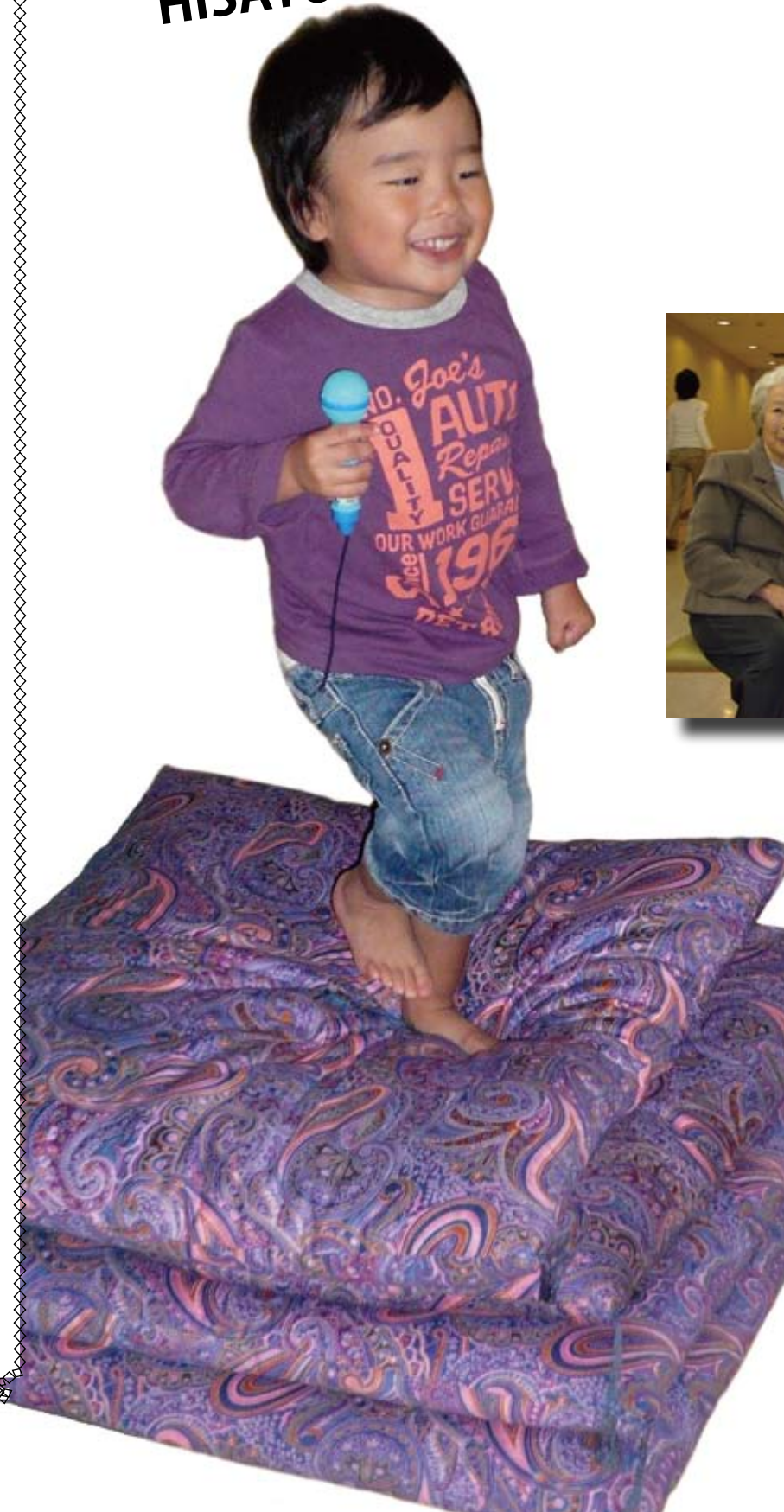


夫をほったらかしてもっばら韓流映画テレビ漬けのYき子は、「私のほうが年上なんよ」と、少し顔を引きつらせながらも「彼女は適任やと思いますミダ」と。

唯一、夫達の妹であるKよ子は「誰でんよかあ、姉さんたちみんなよか人やもん」といつもの控えめコメント。

で、渦中のJん子。九州のどこかに潜伏しているらしいが、ようとして行方つかめない。

HISATO ワンマンショー



住職の母、ひ孫、孫



フーツ！ やっとな歳が越せる

前号『山のたより 30 号』は画像を多用し、さながら写真冊子のような体裁だったが、初めからそういう企画のもとに作成した訳ではなかった。

白状すれば、取りかかりにゆっくりしていたせいで、「さあ、始めるか」とその気になった時にはもう師走に入っていて、「ありゃー、えらいこっちゃ。もう原稿書いている暇ないわ」と言う訳で、あわてて写真をかき集めた。結果、写真誌になっちゃった、と言うワケ。

ずぼらかました為に、「まるで写真雑誌やないか、カメラマンやあるまいし」と見られてるようで、ちょっと後ろめたさを感じていた。

この反省があって、今回は少し余裕を持って取りかかった。

時間があるときに、「さあ、始めるか」とパソコンの前に座る。パソコンの電源を入れた後まず第一に立ち上げるのは、テレビ。パソコンモニターで、左の目でテレビを観ながら右の目で原稿を書いちゃおうと。誠に便利なモノだが、そうは行かない。目の前にテレビがあると、「さあ、書くぞッ！」とキーボードの上に指を置いた万全の態勢を保ったまま固まっちゃう。こんな日が数日続くと、だんだん焦りが出てくる。

「これではイカン、心を入れ替えて真人間になろう」

幸か不幸か、出張が多い。新幹線の行き帰りがうってつけ。車内では集中して書けるので、大いに筆が進んだ。いや、全部新幹線車内で執筆した。

思いの他筆が進むものだから、

勢いでジャンジャン書いた。ところが、だ。レイアウト段階になって、文字原稿や画像などを流し込んでみると、従来の 12 ページ仕立てでは溢れてしまった。16 ページにしても、窮屈で体裁がわるい。

結果、20 ページになってしまった。



震災復興

平成の大事業 行守寺本堂再建



平成大勸進

檀信徒の皆様をはじめとした、有縁の方々に浄財の喜捨をお願いしておりますが、厳しい不況の中、ご理解とご協力戴き誠にありがとうございます。思いがけない多額のご寄付、反対に思いのほか少額の方、いずれに致しましてもご丹誠としてありがたく御礼申し上げます。

まだまだ目標額にはほど遠い状況でございますので、更なるご協力を戴きますよう重ねてお願い申し上げます。

行守寺 住職

総代一同



<http://jss-kobe.com/>

各種
データベースシステム

小ロットでも承ります

kyoshin@jss-kobe.com

万能執事
四柱推命
霊断
様式集
販売管理
その他
データベース
各種



編集後記



【ゴン】 タメ！お前はいいよな、こんなして写真撮ってもらって。可愛がってもらって。ポカポカのコタツの中で自由に寝れるし、外で遊ぶも、家に入るも全く自由。腹が減ったら家族の人にすり寄って、頭スリスリするだけでエサ貰えるし。
オレなんか……、オレなんか……。

【タメ】 なに言うてんねん。あのバカ娘二人やかあちゃんに、毎日オモチャにされてる事実、知らんからや。「タメちゃん、かわいいなあ」言うて、むちゃくちゃ撫で回す。足引っ張る、耳引っ張る、二人で取り合いする、えらい迷惑や。寝よう思うても寝られへん。エサかて、お前の方が、毎日日替わりでいろんな残飯食えるからいいやん、オレなんか、毎日同じカリカリやでえ、嫌になるわ。
寝とったら、最近のネコは全然ネズミ捕らへんなあ言うし、たまにネズミ追いかけて回したら、うるさい言うて怒鳴られるし。どないやツチューねん。

編集 / 発行

〒 652-0054

神戸市兵庫区氷室町 1-11-25

行 守 寺 清 水 教 信

tel 078-511-9691 fax 078-515-2770

e-mail kyoshin@jss-kobe.com